

それから、イエスはご自分の育ったナザレに行き、いつものとおりに安息日に会堂に入り、朗読しようとしてお立ちになった。（ルカ福音書4：16）

皆はイエスを褒め、その口から出て来る恵みの言葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか。」イエスは言われた。「きっと、あなたがたは、『医者よ、自分を直せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、故郷のここでもしてくれ』と言うに違いない。」そして、言われた。「よく言うておく。預言者は自分の故郷では歓迎されないものだ。」（ルカ福音書4：22～24）

主イエスは、青年時代までを過ごした故郷ナザレに帰り、いつものとおりに安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようと立ち上がった。預言者イザヤの巻物が手渡されたので、読み上げた。「主の霊が私に臨んだ。貧しい人に福音を告げ知らせるために / 主が私に油を注がれたからである。主が私を遣わされたのは / 捕らわれている人に解放を / 目の見えない人に視力の回復を告げ / 打ちひしがれている人を自由にし / 主の恵みの年を告げるためである。」この言葉は、第三イザヤ預言者とされる人が召命を受け、派遣される時、苦しむ者に自由と解放が与えられると神の恵みを語った言葉である。主イエスはこの巻物を読み、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話された。第三イザヤが語った預言は、そのまま主イエスにおいて実現した。即ち、捕らわれている人が解放され、目の見えない人の目が開かれ、打ちひしがれている人が立ち上がり、神の恵みの福音が啓示された。ナザレの会衆は主イエスの口から出る神の恵みの言葉を聞いて、褒め、驚いた。しかし、「この人はヨセフの子ではないか」と言う者もいた。主イエスの出自と育ちを見知っているのも、つまりきと不信感を持ったのである。過去に拘り、恵みの今を聞き入れない人に、「『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、故郷のここでもしてくれ』と言うに違いない。」そして、言われた。「よく言うておく。預言者は自分の故郷では歓迎されないものだ。」カファルナウムで力ある奇跡を行ったと聞いているが、故郷のここでも、それを見せてくれと言うだろうが、預言者は、過去を肉の目で見られ、言葉の真実さが聞かれず、受け入れられず、歓迎されないと答えられた。

そして、二人の預言者の例を語られた。エリヤの時代、3年6ヶ月の間、雨が降らず、全地に大飢饉が起こった。イスラエルには多くのやもめがいたが、エリヤは、異教シドン地方のサレプタにいるやもめの所に遣わされ、奇跡をもって彼女と息子を救った。エリシャの時には、イスラエルに既定の病（重い皮膚病）を患っている人が多くいたが、エリシャは異教のシリア人ナアマンだけを清め、癒した。主イエスは、預言者は自国民ではなく、異教の人々を救った故事を話された。これを聞いた会衆は皆、イスラエル人を無視し、汚れた異教徒を救った話に憤慨し、主イエスを町の外に追い出し、山の崖まで連れて行き、突き落そうとした。主イエスは、彼らの間を通り抜けて、立ち去られた。

パウロは、Ⅱコリント5章16節で「それで、私たちは、今後誰をも肉に従って知ろうとはしません。かつて、肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません」と書いている。この言葉は、肉のイエスを知らないパウロが二級の宣教者と見下げられたことへの反論であるが、肉の目ではなく、霊の目で、主イエスを知ることによって、確かな救いに与ることができると勧めているのである。